

スタートカリキュラムの意義について

上越教育大学大学院教授 木村吉彦

はじめに

子供にとって小学校への入学とは、遊び中心の生活から（教科）学習中心の生活へと生活スタイルが大きく変わることである。幼児期の子供たちは遊びながら様々な資質能力を身に付け、小学校以降には授業を中心として学び、やはり様々な資質・能力を身に付ける。遊びを通した学びと教科学習を通した学びの両方をつなぐのが生活科であり、新入児童の最初の段階における生活科を中核としたカリキュラムが、スタートカリキュラムである。本稿は、子供の発達や学びの連続性を大切にする生活科の教科特性や、スタートカリキュラムの意義を明確化するものである。

I 幼児教育と小学校教育の違いと両者をつなぐ生活科の教科特性

ここでは、幼児教育と小学校教育の違いを「教育目的論」「教育方法論」「教育評価論」の3観点から明らかにし、両者をつなぐことで5歳児から小学校一年生への学びの連続性を保つものとしての生活科の教科特性を明らかにする。

1 幼児教育と小学校教育の違い

（1）教育目的の観点から

『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』の中の「ねらい」を具体的に見てみると、それらは育てたい子供の姿であり、子供を育てる方向性を示したものである。例えば、領域「健康」のねらい（2）

は「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」となっている。これは、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」となっている。これは、運動好きの子供を育てることを意味している。幼児教育の場合、サッカーで運動好きになってもよいし、なわ跳びで運動好きの子供になってもかまわない。また、シュートが上手かどうか、なわ跳びが何回跳べるかは特に問われない。このように子供の育ちの方向性を示す教育目標のことを「方向目標」と言う。

一方、小学校ではどうだろうか。「なわとび名人カード」というものを多くの小学校で作っている。教科・体育の目標として「運動好きの子供を育てたい」という方向目標もあるはずであるが、実際

の授業となると、例えば前回50回以上跳べないと「なわとび名人」としてのスタンプはもらえない。このような教育目標を到達目標と言う。

(2) 教育方法の観点から

幼児教育の基本は「環境を通して行う教育」である。これは、子供が自分から進んで動き出したくなるような教育環境設定に基づく教育方法を意味する。これを間接教育と言う。すなわち、間接教育とは、教（保）育のねらいや目標を学習（保育）環境に反映させることによって、子供の主体的な活動を誘発しようとする教育方法のことである。

一方、教科書を使って行われる方法に代表される直接教育が、小学校以上の教育方法の中心である。教師のねらいや意図を直接指示・命令することで行われる教育方法である。

(3) 教育評価の観点から

幼児教育では、これまでも、その自身のかつての姿と今の姿を比べてその「伸び」を明らかにする個人内評価を大切にしてきた。これは、他者との比較によらない評価という意味で絶対評価の考え方である。

小学校でも、現在は他者との比較をせずに評価規準（目標準拠評価）による

絶対評価をもとにして全人的に子供を理解しようとする評価が求められている。

両者の違いをあえて言えば、「指導要録」の記述の仕方である。子供の姿を文章表現する幼児教育とABC評価を書き出す小学校教育である。

2 幼児教育と小学校教育をつなぐ

ものとしての生活科

次に生活科の教科特性を、やはり3つの観点から明らかにしよう。

(1) 教育目的の観点から

生活科の究極的な教科目標は「自立への基礎を養う」である。人間が社会的に独り立ちするための基礎的部分を育てるという子供像と育てたい方向性が示されている。これは明らかに「方向目標」である。しかし、実際の授業では、独り立ちするための資質・能力を「到達目標（行動目標）」として設定して授業を展開して構わない。すなわち、「生活科の教育目標は到達目標を内に含んだ方向目標」である。

(2) 教育方法の観点から

例えば、「秋をさがそう」という單元

では、「秋を見つけさせたい」という教師のねらいが反映された公園という（物的）教育環境に子供を連れ出し、子供が自分から秋を見つけたくなるような言葉かけをして授業をする。これは、まさしく「間接教育」の考え方による教育方法である。一方、教室に戻ったら、作文シートや学習カード等に今日の活動や感想を書く時間を設ける。このとき教師は、「シートに作文書いてね」と直接指示をする。「生活科の教育方法の基本は間接教育であるが、適宜直接教育を取り入れた指導も行われる。」

(3) 評価論の観点から

生活科では対象が小学校低学年ということもあり、他児との比較によるのではなく、まさにその子の「伸びを認めて褒めてあげる」こと（「個人内評価」）が基本である。しかし、小学校なので、「指導要録」には「評価規準」に基づく「ABC評価」を書く必要がある。「生活科の評価は評価規準を前提とした個人内評価（絶対評価）」である。

(4) 幼小連携の鍵を握る教科

としての生活科

以上のように、生活科は、幼児教育と

小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科であり、幼小連携の鍵を握る教科である。それは、生活科が幼児期の学びと新入児童1年生の学びをつなぐ役割を果たしていることを意味している。この教科特性こそが、スタートカリキュラムの中核を担うのが生活科であることの必然性を意味している。

Ⅱ スタートカリキュラムの意義（幼児期の学びと1年生の学びをつなぐ）

Ⅱでは、「スタートカリキュラム」の定義や意義について述べたい。

1 スタートカリキュラムとは

（『小学校学習指導要領解説 生活編』
四三～四五頁をもとに）

今改訂において、「生活科の指導計画作成と内容の取扱い」の中に「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること」が付加され、この文言を基に『解説』「第4章 指導計画作成上の配慮事項」の（3）に、「スタートカリキュラムの編成」が新入児童の小学校生活

への適応を促し、小1プロブレムなどの問題解決に効果的であるという見解が示された。ここでは、それぞれのキーワードについて、木村なりの定義付けを行う。

（1）スタートカリキュラムの定義

スタートカリキュラムとは、新入児童の入学直後約1ヶ月間において、子供が幼児期に体験してきた遊びの要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせ、合科的・関連的な学習プログラムのことである。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、子供に「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらし、新入児童の小学校へのスムーズな「適応」を促してくれることが期待される。

（2）合科的な指導とは

スタートカリキュラムの中心となる合科的な指導とは、学習のねらいとして抽象度の高い「方向目標」を定め、その目標を達成するために、遊びの要素の強い活動や教科にも連動するような活動を取り入れ、子供の登校意欲や学習意欲を高める指導のことである。例えば、「が

っこうだいすき」という单元名にし、目標を「学校が大好きになり、明日も学校に行きたいと思える子どもを育てること」と設定する。実際の活動としては、学校探検（生活科）・自己紹介（国語）・友だち何人？（算数）・校歌を歌おう（音楽）・自画像で自己紹介（図画工作）等を取り入れ、様々な教科学習に結びつく活動遊びながら展開していくことが考えられる。スタートカリキュラムは、「育てたい子供像Ⅱ活動を中心とした学習全体のねらい」が先にある合科的指導が相応しく、特に重要な要素であることがわかる。

生活科の持つ教科目標の抽象度の高さ（「自立への基礎を養う」と学習の自由度の大きさ（学習の大枠は教師が決めるが具体的な学習内容は子供が決める）が、スタートカリキュラムをより効果的にする。スタートカリキュラムが生活科を中核とした合科的な指導に基づくことが望ましいという理由は、ここにある。

2 スタートカリキュラムの意義と

作成のポイント

（1）新入児童のスムーズな「適応」を生み出す

遊び中心の生活から教科学習中心の生活へと生活スタイルが変化することは、子供にとってかなり大きな「**段差**」である。これまでは、自分で決めた課題（自分のしたい遊び）を自分で実現・達成する生活が中心だったが、教科学習は外からの課題であり、自分がどのように対処したのか（知識・技能の習得）が問われるからである。

これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子供にとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信がもてるきっかけになる。これが、スムーズな「**適応**」を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義である。

（2）子供も安心・保護者も安心・

先生も安心

（1）で述べたことは、子供にとっての安心プログラムである。それに加え、全校体制でスタートカリキュラムに取り組むことで、保護者や担任教師も安心して新入児童と関わることができる。1週間の予定表を事前配布され、各教科等の配当時間数等が示されると、保護者は「ち

やんと勉強しているんだ」と喜んでくれる。また、担任のみならず、入学後約1ヶ月間は管理職、養護教諭、特別支援教諭、また保護者ボランティア等、様々な大人の方々に新入児童を見守ってもらふことで、子供達は安心感と安定感を持つことができる。同時に担任教師も焦らず、じっくりと子供たちの実態を見取ることができる。

（3）小学校生活に必要な生活習慣形成

多くの学校では、「ソーシャルスキルトレーニング」をスタートカリキュラムに取り入れていると思われるが、学校生活に必要な生活習慣（ルール遵守の精神や規範意識）を楽しみながら経験すること、子供たちが主体性・社会性を同時に並行的に身に付けられるように指導していただきたい。

おわりに

ここで確認しておきたいことがある。それは、スタートカリキュラムが、小1プロブレム対策のための対症療法を意味するものではない、ということである。スタートカリキュラムは、生活科設立の

趣旨である「子供の発達実態に基づき、一人一人の子供理解をもとに学習を進める」という発想に基づいたカリキュラムであり、文字通り、生活科本来の趣旨に則った学習活動そのものである。最後に、木村はスタートカリキュラムを短期・中期・長期という3つの観点からも意味付けている。短期Ⅱ小学校1年目のスタートライン、中期Ⅱ小学校6年間のスタートライン、そして長期の観点では、自分の人生を主体的に生き抜くためのスタートラインがスタートカリキュラムなのである。

（きむら・よしひこ）

【参考文献等】

木村吉彦『生活科の理論と実践―「生きる力」を
はぐくむ教育のあり方―』日本文教出版、平成
二十四

木村吉彦監修・仙台市教育委員会編『「スタート
カリキュラム」のすべて 仙台市発信・幼小連携の
新しい視点』ぎょうせい、平成二十二年

木村HP「よっちゃんの部屋へようこそ」(sun-c
c.juen.ac.jp/~kimura/yocchan.htm)

